

調査報告

トロス司教座聖堂から出土した動物遺存体

松崎 哲也

キーワード

動物遺存体 聖堂 家畜

本稿では二〇一四年度のトロス司教座聖堂の発掘調査で出土した動物遺存体について報告する。遺跡の詳細については浦野報告を参照いただきたい。

動物遺存体は、聖堂および周辺施設から出土したものである。各地点から出土しているが、なかでも附属礼拝堂内陣、南翼廊第七室からは比較的まとまって出土している。したがって、全体の概要を示した後、上記の三地点から出土した動物遺存体を中心に考察をおこなう。

一．分析資料

分析資料は、発掘中に取り上げた資料と、遺跡内の土壌を一ミリメツシユのふるいにかけてることで発見された資料がある(以下ふるい資料)。遺跡から出土する遺物の中には、肉眼では発見することが困難な小さなものが含まれている可能性がある。通常の発掘作業では、小さな遺物は見逃されてしまう場合が多いが、ふるいを使用することでそれらを取り上げることができる。ただし、その分作業には時間や労力などが必要である。今回の調査では第七室とその他一部の土壌についてふるいがけをおこなった。出土した動

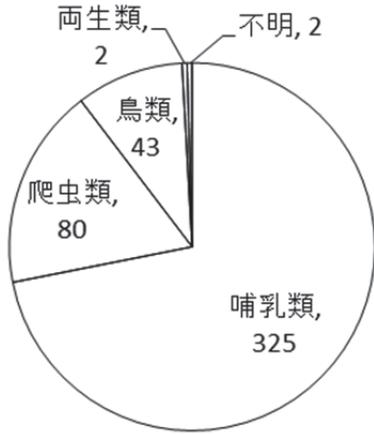


図1 動物遺存体の組成 (n=452)

物遺存体のほとんどは破片であり、同定が困難な資料も多く含まれていた。そのため、部位の判明したものを対象として分析をおこなった。出土した動物遺存体は破片点数で四五二点、そのうち何らかの分類群に同定できたものは三四三点であった(図1)。

二. 同定結果

動物遺存体は哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類が含まれている。以下では動物の分類群ごとに述べる。

哺乳類は計三二五点出土した。同定した分類群はヒツジ、ヤギ、ウシ、イノシシもしくはブタ、ネズミ科、ネズミ亜科、ハタネズミ亜科である。ヒツジとヤギはいずれもウシ科に含まれ、骨の外部形態が非常に似ていることに加え、種内差が大きいことから大部分は種まで同定することができなかった。これらはヒツジもしくはヤギとして扱った。また、ブタはイノシシを家畜化したものであり、「種」としてはイノシシに含まれるが、外部形態から家畜かどうかを判断するのは困難であるため、イノシシもしくはブタとして扱った。

ヒツジ／ヤギはほぼすべての地点から出土しており、計五〇点同定した(写真1)。同定部位は頭蓋骨、遊離歯、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、中手骨、中手骨もしくは中足骨、椎骨、寛骨、踵骨、距骨、指骨である(骨格部位については図2を参照)。この他に下顎骨と思われる破片が出土している。骨端部の癒合していない若い個体が比較的多く出土している。また、種同定できなかった破片の中には、ヒツジ／ヤギサイズのもが多く含まれている。



写真1 大型哺乳類

1～3 ウシ（遊離歯、中足骨、大腿骨）、4・6 イノシシ／ブタ（下顎骨、第二中手骨）、5・7～9・12 ヒツジ／ヤギ（頭蓋骨、胸椎、尺骨、橈骨、中手骨）、10 ヤギ（肩甲骨）、11 ヒツジ（中手骨）



写真2 ヤギ左肩甲骨

※左下に解体痕が認められる

特記すべき点として、附属札拝堂から出土したヤギの左肩甲骨が挙げられる（写真2）。この肩甲骨には二本の傷のような痕跡が認められる。おそらく刃物でつけられたもので、傷のある部分は上腕骨と関節でつながる部分の少し上、つまり腕の付け根の辺りになり、腕を切断する際につけられた可能性が高い。このような痕跡が残されていることから、このヤギは人によって解体されたものであると考えられる。

ウシは計一六点同定した(写真1)。同定部位は頭蓋骨、遊離歯、大腿骨、脛骨、寛骨、椎骨、中足骨、指骨である。附属礼拝堂からの出土が多く、聖堂内からは遊離歯と指骨のみが出土している。ウシもヤギ／ヒツジと同様に若い個体が多い。なお、点数には含めなかったが、ウシの下顎骨と思われる破片が内陣から一点出土している。関節突起の下部にあたる下顎切痕と呼ばれる部分で、解体痕が認められる。

イノシシ／ブタは計七点同定した(写真1)。同定部位は下顎骨、遊離歯、第三中手骨、第二中足骨である。聖堂および附属礼拝堂から出土している。イノシシ／ブタも若い個体が多い。第七室から出土した第三中手骨の近位端には咬み痕のような痕跡が残されている。人もしくはイヌなどによってつけられたものと思われる。

ネズミ科は計一八二点同定した(写真3)。同定部位は頭蓋骨、下顎骨、遊離歯、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、椎骨、仙骨、寛骨、大腿骨、脛骨、中手骨もしくは中足骨、指骨である。ほぼ全身の骨格が含まれている。歯の形態からネズミ亜科とハタネズミ亜科の特徴をもつものがあり、少なくとも二種類以上が含まれていると思われる。ネズミ亜科にはドブネズミなどが、ハタネズミ亜科にはハタネズミなどが含まれる。ネズミ科はふるい資料から見つかった

ものであるため、第七室からの出土が多い。

鳥類は計四三点同定した(写真4)。トルコ国内に生息している鳥類の現生骨格標本との比較ができなかったため、一部を除き種同定はできなかった。外部形態からおそらく五種類は含まれていると思われる。いずれも小型、中型の鳥類であり、スズメ目、キジ科に似るものが含まれている。キジ科には家禽であるニワトリが含まれるが、該当資料は比較的小さな個体である。同定部位は鳥口骨、上腕骨、尺骨、手根中手骨、椎骨、大腿骨、脛足根骨、足根中足骨、指骨である。小型鳥類は、ネズミ科同様ふるい資料から見つかったものが多い。

爬虫類は計八〇点同定した(写真5)。リクガメ科が七九点、ヘビ亜目が一点である。リクガメ科はほとんどが甲板であり、上腕骨と寛骨がわずかに含まれている。第七室からの出土が非常に多い。ヘビ亜目は椎骨が一点のみ出土している。

両生類は計二点同定した。いずれも無尾目(カエル目)である。同定部位は脛腓骨と大腿骨である。

以上が出土動物遺存体の同定結果である。出土点数では哺乳類が七割以上を占めている(図1)。特にネズミ科が非常に多く、哺乳類の半数以上、全体でも約四割を占める結果となった。大型哺乳類はヒツジ／ヤギが最も多く、次

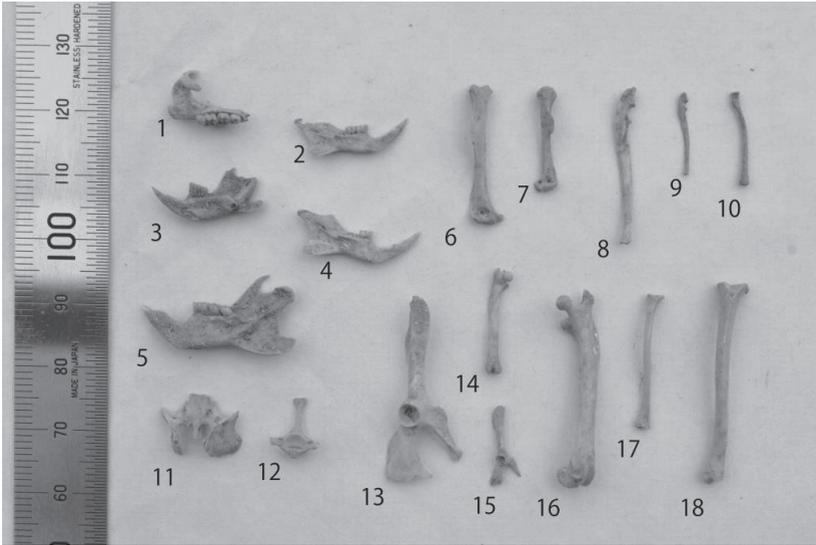


写真3 ネズミ科

1 頭蓋骨、2～5 下顎骨、6・7 上腕骨、8・9 尺骨、10 橈骨、11 仙骨、12 胸椎、13・14 寛骨、15・16 大腿骨、17・18 脛骨



写真4 鳥類

1～3 上腕骨、4 鳥口骨、5・6 尺骨、7 手根中手骨、8～10 大腿骨、11・12 脛足根骨、13 足根中足骨

※10の大腿骨は中型哺乳類の誤りである。



写真5 リクガメ科甲板

いでウシ、イノシシ／ブタが少量混じる組成となっている。また、種同定はできなかったが中・小型の哺乳類がわずかに含まれている。鳥類は、哺乳類と比べると少ないが、各地点から少量ずつ出土している。爬虫類・両生類ではリクガメ科が多い。

三、地点別の組成

動物遺存体が比較的まとまって出土した附属礼拝堂、内陣、南翼廊第七室の三地点についてそれぞれ破片点数と最小個体数を算出した（表1）。最小個体数とは、ある動物が少なくとも何個体存在するかを示したものであるが、個体数の算定に有効な部位が少なく、算出された個体数は少なかった。そのため、最小個体数は参考までに記載しているが、主に破片点数に基づいて検討をおこなう。

附属礼拝堂では計三九点同定した。破片点数ではウシが多い。左の後肢に偏りがあることから、交連状態で捨てられた可能性がある。ヒツジ／ヤギは、点数ではウシより少ないが、同定できなかったものの中にヒツジ／ヤギサイズの大腿骨や肋骨の破片があり、実際にはヒツジ／ヤギの方が多くと考えられる。鳥類はキジ科に似た特徴をもつものが出土している。

トロス司教座聖堂から出土した動物遺存体（松崎）

内陣では計八五点同定した。今回の調査でヒツジ／ヤギが最も出土したのが内陣であった。この他にもヒツジ／ヤギサイズの肋骨や指骨などが少なからず含まれており、附属礼拝堂と同じく実際にはさらに多いものと考えられる。ウシは遊離歯と指骨（末節骨）が出土しているが、附属礼

種名	破片点数			最小個体数		
	礼拝堂	内陣	第七室	礼拝堂	内陣	第七室
ヒツジ／ヤギ	9	25	6	2	2	2
ウシ	10	4	0	1	1	0
イノシシ／ブタ	1	0	2	1	0	1
ネズミ科	0	13	162	0	2	23
不明哺乳類	13	31	14	0	2	0
鳥類	5	10	24	2	3	6
リクガメ科	1	2	74	1	1	2
カエル目	0	0	2	0	0	1
合計	39	85	284	7	11	35

表1 地点別出土動物遺存体表⁽³⁾

拝堂と比べて数は少ない。また、種不明の中・小型哺乳類が出土している。ネズミ科と一部鳥類はふるい資料から見つかったものである。

第七室では計二八四点同定した。すべて家族墓と想定された、高さ四〇〜五〇cm、長さ一九〇〜二〇〇cm、幅二九五cmの構造物（T5）から出土したものである。ネズミ科とリクガメ科が非常に多く出土している点の特徴である。ネズミ科は破片点数で一六二点、最小個体数でも二三個体と非常に多い。リクガメ科は甲板が多く、上腕骨と寛骨が数点出土している。他の地点と比べて多量のネズミ科が出土していることについては、採集方法の違いによるものと考えられる。ただし、他の地点において土壌の一部をふるいにかけてところ、採集された骨は少なく、採集方法のみによる影響とは考えにくい。むしろ、第七室において例外的に多量に含まれていた可能性が高いと言える。この点に関しては第五項で詳しく触れる。鳥類は、スズメ目のような小さな個体が多い。これらもふるい資料から見つかったものである。

以上が出土地点別の様相である。いずれの地点でもヒツジ／ヤギが多い点で共通している。一方で、第七室においてネズミ科とリクガメ科が非常に多く出土している点はかなり特殊であることが分かる。

四・出土動物遺存体の特徴

トロス司教座聖堂から出土した動物遺存体は、聖堂の床面付近から出土したものが多く、これらの動物遺存体は、聖堂が使用されていた時期に捨てられたとは考えにくいため、放棄された後のものと考えられる。しかしながら、聖堂という通常の生活空間とは異なる特殊な場所から動物の骨が出土していることは非常に興味深い。これらの中には、解体痕など明確な痕跡を有するものは少ないものの、人為的に持ち込まれたものである可能性が高い。

大型哺乳類のうち、最も多く出土したのはヒツジ／ヤギであり、同定ができなかった破片の中にもヒツジ／ヤギと思われる骨が数多く含まれている。最小個体数でもウシ・イノシシ／ブタを上回っており、ヒツジ／ヤギが利用の中心であったことは容易に想像がつく。また、大型哺乳類はいずれも若い個体に偏りが見られる。野生動物であれば、年齢構成は若齢から老齢まで幅広く出土する場合が多い。このような点からも、自然死した動物が偶然聖堂内に埋まったのではなく、家畜として飼われていた動物が人為的に持ち込まれ、廃棄されたものであることが推測できる。出土数の多いヒツジ／ヤギで見ると、頭部から手足の先まで出土しており、特定の部位を選択して持ち込んだわけ

史苑（第七五巻第二号）

はないようである。ただし、中手骨や指骨といった手足の先端部が多く、上腕骨や大腿骨などの主要な四肢骨はあまり出土していない。このことから、解体した際に手足の先端など不要な部位をこの場に捨て、それ以外の部位は食用として持ち帰ったと考えることもできる。とはいえ、聖堂という特殊な空間であることを考慮すると、解体という行為が単に食利用のためではなく動物供犠に伴っておこなわれたものであっても不思議ではない。実際に、祭壇が置かれている内陣においても最も多くの大型哺乳類が出土しており、何らかの関係性を示しているようにも思われる⁵⁾。

五・南翼廊第七室の構造物（T5）について

T5からはネズミ科が非常に多く出土しており、他の地点と比べて特異な様相であることはすでに指摘した。当初、この構造物は家族墓と想定されたが、人骨は全く検出されず、青銅製のピンセットが一点のみ見つかった。しかしながら、浦野報告で指摘されているように、人骨が別の場所に移された可能性も否定できない。

動物遺存体からT5の用途を明らかにすることは困難であるが、少なくとも埋没直前の状態を推測することは可能である。出土したネズミ科には、全身の骨格部位が多数含

トロス司教座聖堂から出土した動物遺存体（松崎）

まれており、相伴した大型哺乳類の骨にはネズミの咬み痕がついたものが認められる。また、リクガメ科は二つある区画のうちの一方から多量に出土し、もう一方からは全く見つかっていない。このことは、T5から出土した遺物が一括性の高い資料であることを示している。つまり、直前までこの場に存在していたものが、多量の瓦礫によってパックされたような状態にあったと考えられる。内部に詰まっていた石材などの堆積状況から自然崩落である可能性が指摘されているが、動物遺存体の出土状況もこの説を支持している。おそらくT5は、崩落直前までネズミの巣穴になっていたのだろう。カメに關しても同様で、偶然聖堂内に入り込んだと考えた方が妥当である。現在も遺跡周辺には同一種と思われるリクガメが生息している。また、少量ではあるが、出土した大型哺乳類の組成は内陣と似ており、内陣と同様に不要な部位が廃棄されたと考えられる。したがって、少なくともこの構造物は、埋没する直前には不要なものが捨てられ、ネズミやカメが入り込めるような状態であったと言える。

六. まとめ

トロス司教座聖堂では、聖堂が放棄された後に家畜が持ち込まれ、何らかの行為がおこなわれた。それが食利用のためであったのか、供犠として捧げられたのかは出土資料から判断することはできなかった。しかしながら、放棄された後のこととはいえ、聖堂が屠殺の場として使用されていた可能性は高く、聖堂という空間を考える上で重要な示唆を与えているように思われる。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、発掘調査隊の先生方および学生の皆様からは多大なるご助言、ご助力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

表2. 出土動物遺存体種名表

哺乳綱	Mammalia
ウシ	<i>Bos taurus</i>
ヒツジ	<i>Ovis aries</i>
ヤギ	<i>Capra hircus</i>
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
ネズミ科	Muridae spp.
ネズミ亜科	Murinae sp.
ハタネズミ亜科	Arvicolinae sp.
鳥綱	Aves
スズメ目	Passeriformes spp.
キジ科	Phasianidae sp.
爬虫綱	Reptilia
リクガメ科	Testudinidae sp.
ヘビ目	Serpentes sp.
両生綱	Anura
無尾目	Amphibia sp.

史苑(第七五卷第二号)

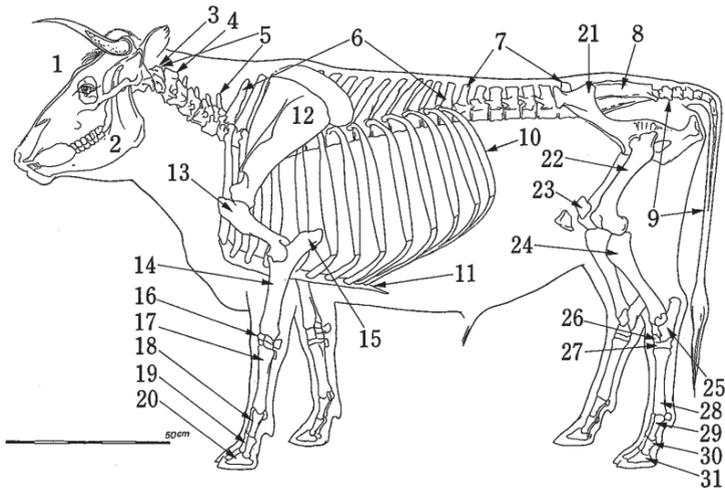


図2 哺乳類(ウシ)の全身骨格と部位名称⁽⁵⁾

1 頭蓋骨、2 下顎骨、3 環椎、4 軸椎、5 頸椎、6 胸椎、7 腰椎、8 仙骨、9 尾椎、
 10 肋骨、11 胸骨、12 肩甲骨、13 上腕骨、14 橈骨、15 尺骨、16 手根骨、17 中手骨、
 18 基節骨、19 中節骨、20 末節骨、21 寛骨、22 大腿骨、23 膝蓋骨、24 脛骨、
 25 踵骨、26 距骨、27 足根骨、28 中足骨、29 基節骨、30 中節骨、31 末節骨

トロス司教座聖堂から出土した動物遺存体(松崎)

註

- (1) 浦野聡「トロス司教座聖堂発掘報告(二〇一四)―考古学・建築上の知見から―」(本誌所収)。
- (2) 種の同定にあたり、奈良文化財研究所環境考古学研究室所蔵の現生骨格標本を使用したほか、以下の書籍・論文を参考とした。松井章『動物考古学』京都大学学術出版会、二〇〇八。Melinda A. Zeder, Heather A. Lapham, Assessing the reliability of criteria used to identify postcranial bones in sheep, Ovis, and goats, *Capra. Journal of Archaeological Science* 37, 2010, pp.2887-2905. Wietske Prummel, Hans-Jörg Frisch, A Guide for the Distinction of Species, Sex and Body Side in Sheep and Goat. *Journal of Archaeological Science* 13, 1986, pp.567-577.
- (3) 第七室はすべて、内陣は一部土壌をふるいにかけて採集している。不明哺乳類とした破片の多くはヒツジ／ヤギである可能性が高いため、最小個体数は「0」個体とした。なお、内陣には中・小型哺乳類が二個体存在する。
- (4) マルセル・モース、アンリ・ユベール(小関藤一郎訳)『供儀』叢書ウニベルシタス119、法政大学出版局、一九八三。
- (5) 久保和士・松井章「第10章家畜(その2)―ウマ・ウシ」『考古学と動物学』考古学と自然科学②、同成社、一九九九、一六九〜二〇八頁。

(京都大学大学院博士後期課程)

Basilica Excavation Report, Tlos 2014: Faunal remains

MATSUZAKI, Tetsuya

史苑
(第七五卷第二号)

During the excavation of the Basilica at Tlos in 2014, we found animal bones. Animals that identified are as shown below.

Mammals: sheep, goat, cattle, mouse and wild or domestic pig.

Birds: Phasianidae (like pheasant, chicken) and Passeriformes.

Reptiles: tortoise and snake.

Amphibia: frog.

In chancel, most of these bones are young sheep/goats. It is difficult to determine whether these domestic animals were eaten or sacrificed, but what is important is that the animal bones were excavated from chancel. These bones were thrown away by people.

On the other hand, a lot of mouse bones were found in T5 (room7). It is likely that this area was a nest of mouse after the Basilica was abandoned.